２０２２年３月１３日（大斎節第２主日、C 年）牧師メッセージ
「神は集める」

（ルカによる福音書 13：31－35）

司祭ヨセフ太田信三

エルサレムへの旅を続ける主イエスに、ファリサイ派の人々が「ヘロデがあなたを殺そうとしているから、この地から離れてください。」と伝えました。それは一見、良心的な提案であり、間違いなど無いように感じられます。しかし、主イエスはその提案には従いませんでした。なぜでしょうか。

ファリサイとは「分離」を意味し、ファリサイ派の人々は律法を遵守するために、世俗の汚れから自分自身を分離し、自らで自らを守ろうとした人々でした。それは、言うなれば自ら守りを固め、自らの力に頼って生きる信仰でした。しかし、自らの守りではなく、神の守りに自らを置くのがまことの信仰です。神はめん鳥が雛を羽の下に集めるように、人を集め、その翼のかげで守ってくださる方だからです。ファリサイ派的「守り」の信仰は、この神の力ではなく、自らの力を誇る道に繋がっています。ですから、たしかに彼らは主イエスを守るために「この地から離れる」ことを提案したのかもしれません。しかし、その一見敬虔深く見える提案も、結果としては「人を集め、守られる」神の思いからは離れたものであったのです。それゆえ、主イエスは彼らの提案を拒否し、エルサレムへの旅、十字架への歩みを続けます。

ファリサイ派の提案に対し、主イエスは次のように応えました。

「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」

「今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」

人を集め、その翼のかげで守る神の意思は強力です。それは、主イエスが「今日も明日も」エルサレムに決然と向かう姿に表されています。主イエスは旅の行き着く先、十字架上で「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 22:34）と叫びます。その叫びは、御子を十字架へと追いやる人間、神から離れてしまうすべての人間を何とか救いへと招きたいという「懇願」です。その人間のために祈る主イエスの姿に、神の人間への思いの深さが表されています。人間が神の招きの手を振りほどき、御子を殺すその時においてなお、神は人を求めてくださるのです。人間が神を捨てたとしても、神が人間を捨てることは絶対に無いのです。

人は預言者を殺し、御子を殺しました。しかし、神はそんな人間から決して離れることなく、悔い改めて、立ち返ることを望んでくださっています。あらためて、人間存在としての自らを省み、自らの力ではなく、神の力強い救いの招きにこそ信頼して生きたいと願います。